

# 家持天平二十年出拳の諸郡巡行歌の特質

木村

斌

## はじめに

天平二十年、家持は三十一歳になっていた。越中の守として三年目を迎えていたが、昨年の春には死を意識する病氣との闘いもあった。春の出拳のことは話題にも上らなかったようであるが、今年は越中の守として本格的な初めての巡行であったのであろうか。

五年間越中で国守の任にあつたのであるから、毎年このような諸郡を巡行する旅行をしていたのかも知れないが、出拳の旅については天平二十年春と天平勝宝二年二月の記録があるのみである。

ちなみに天平二十年の出拳で詠まれた九首の歌は、作品としても興味深いものが多い。全体は越中で四首と能登での五首に別けて二段構成として考察が可能である。真下厚氏は、越中で四首と能登での五首とを、前半は①から

⑤の「馬による巡行」、後半は⑤から⑨の「船による巡行」を印象付ける、とする。これらの歌は、緊密な構成を持つのであろうか。

礪波郡の雄神川の辺にして作れる歌一首

①雄神川紅にほふ少女らし葦附〔水松の類〕採ると瀬に  
立たすらし（四〇二一）

婦負郡の鵜坂川の辺にして作れる歌一首

②鵜坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足掻の水に衣濡れにけ  
り（四〇二二）

鵜を潜くる人を見て作れる歌一首

③婦負川の早き瀬ごとに簪さし八十伴の緒は鵜川立ちけ  
り（四〇二三）

新川郡の延槻川を渡りし時に作れる歌一首

④立山の雪し消らしも延槻の川の渡瀬鎧浸かすも（四〇

## 二四)

氣太の神宮に赴き参り、海辺を行きし時に作れる

### 歌一首

⑤之乎路から直越え来れば羽咋の海朝風ざしたり船梶も  
がも (四〇二五)

能登郡の香島の津より発船して、熊来村を指して  
往きし時に作れる歌二首

⑥鳥総立て船木伐るといふ能登の島山 今日見れば木立  
繁しも幾代神びそ (四〇二六)

⑦香島より熊来を指して漕ぐ船の梶取る間なく都し思ほ  
ゆ (四〇二七)

鳳至の饒石川を渡りし時に作れる歌一首

⑧妹に逢はず久しくなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へ  
てな (四〇二八)

珠洲郡より発船して治布に還りし時に、長浜の湾  
に泊てて、月の光を仰ぎ見て作れる歌一首

⑨珠洲の海に朝びらきして漕ぎ来れば長浜の浦に月照り  
にけり (四〇二九)

右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行  
し、当時当所にして属目してつくれり。大伴宿祢

家持

## 一、越中・能登の出挙

出挙とは、春に種粃を貸し出し、秋の収穫に利子をつけて返納させる制度である。家持は国守であるから、視察のために諸郡を巡行しなければならなかった。越中・能登それぞれ四郡からなっていた。前年には上京の折のお土産として二上山賦、布勢の水海賦、立山賦を創作した。これは、都の人に見せる意識があり、病後の回復がすすみ、さらに正税帳使として上京するという諸々の創作意欲から生まれた、と考えられる。勿論、今次の春の出挙での創作は、越中・能登に対する純然たる興味だけから歌が詠まれたのではない。また、都の人に公表されればそれなりの評価がなされるのであろうが、さしあたって都へのお土産ということも天平二十年のこの時には考えがたい。とすれば前年に大伴池主と五賦を作ったことと同質ではない。人々に披露するということもあつたであろうが、もつと国守家持といながら自己の内面に基づく私的な創作意欲などが大きな力になっていたのであるまいか。即ち、これらの巡行歌は、越中・能登という風土に対する明確な創作意欲に基づく面もかなり強かつたということである。歌に示された題詞によれば、家持が視察した処は、今日でいうところの越中・

能登の国のほぼ全域にあたる。四〇二九番の左注には「當時所にして属目して作れり」とあるように、歌もある特定の地域に偏らずにすっかり目にしたところが詠まれている。地名などは羈旅の進行にそっていると考えられる。また、正確な日時は知られないが、春の出挙の歌が詠まれた前後に正月二十九日（四〇二〇 左注）と三月二十三日（四〇三二 題詞）の日付もある。また、天平勝宝二年二月十八日（十八・四一三八 題詞・左注）に開墾を許した田地を檢察するために砺波郡に出かけていること、或いは天平勝宝二年三月九日に出挙で出かけたことを記す歌の注記もあるので、二月説と三月説がある。

時期、行程について触れた文献として昭和五十年以前の諸説については、大越寛文氏が詳しく紹介されている。<sup>②</sup>家持の国内巡行については、大井重二郎氏が考察している。<sup>③</sup>大井氏は、巡行についてやした日数が一ヶ月を越えただろうとした。伊藤博氏が巻き十七・十八・十九が二月で終わっているとしていて、「おそらくは、天平二十年（七四八）二月一日から始まる、二十日程度は要したであろう」という。<sup>④</sup>葦附のり、鵜飼いなどはこれらの歌が作られた季節に関わらないのであるから、その他の条件を参考にしても出挙の時期は、二月説が妥当であろう。

出挙の研究では、舟尾好正氏と宮原武夫氏が詳しい。<sup>⑤</sup>即ち、公出挙は、春と夏にそれぞれ行われ、種まき用の種子貸与、食料としての貸与、等の意味があった。天平九年の但馬国は、春・夏十八日、天平十年の駿河国は春・夏二十一日、周防国は、春・夏二十一日、それぞれ出挙に費やした日数である。家持は越中と能登の二国を出挙で巡っているのであるし、能登では船旅を主としていたようであるので単純な比較はできないが、一気に越中と能登を巡ったのではなかったか。加えて雪解け水に初めて気がついたと思われる歌などもあつて、二月中旬を核とした三週間程度、また延べ三〇〇キロメートル程度の旅行であつた、と考えたい。

まず春の出挙で最初にうたわれたのは、①「雄神川」（四〇二二）の歌である。題詞にある「礪波郡」にあるとする。砺波とは高岡市の南に位置している平野であり、その付近を流れる現在の庄川が万葉集の雄神川である。

この歌について、第四句にある「葦付（水松の類）」を、「川もづく」か「あしづきのり」とするかで意見が分かれている。わざわざ注を付け、藻を特定させようとしたことに意味もあるのであるが、越中の特異性がこの注によって増したことも事実である。さらに歌に対する評価として

は、次の如くである。<sup>(6)</sup>窪田評釈は、村の娘たちが河へ入つて葦付を採っているのを見ての興、という。土屋私注は、卷七・一二一八の影響を指摘する。武田全註釈は、全体に卷七の歌との類似をいう。沢瀉注釈は、卷七の一首を模倣したもの、とした。橋本全注は、家持の脳裏には諸注が指摘する歌が浮かんだとしても、地方色豊かな印象の鮮明な歌とする。中西家持は、紅という歌語の使用から雄神川の歌が幻想的な風景であるとする。伊藤積注は、この一首について積極的に評価していて、「筆者は、一首を家持の代表的な短歌の一つに加えるのにやぶさかではない」という。これまで諸注が引用する一首とは次の歌である。

黒牛の海紅にはふもしきの大宮人し漁すらしも  
(七・一二一八)

中西・伊藤説の中核をなすのは、幻想と言うことにある。中西説では、雄神川が紅に染まっている風景を、赤裳の少女によって川全体が紅色に染まっているとして、人麻呂・旅人の例を引用している。

嗚呼見の浦に船乗りすらむ臈婦らが珠裳の裾に潮満つ

らむか(一・四〇) 人麻呂

松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ  
(五・八五五) 旅人

雄神川の瀬に立っているのは鄙の女性であつて、都の晴れやかな衣装に着飾つた赤裳の官女ではない。松浦川の瀬で鮎釣りする女性も都の官女ではないはずであるが、都風の女性に見立てている。人麻呂は、持統天皇の伊勢行幸に従わず、都に居て想像してうたつた一首である。裳の裾が濡れることがいかに妖艶なことになるのかがこの二首の歌で知られるし、また実際見ているとかいう写真ということよりも、想像に基づく、或いは幻想をうたうことの華麗な響きがこの人麻呂と旅人の歌にはある。同様に家持は、川面が紅に輝くというのであるから、鄙びた処に場違いの官女が多数いたことになる。もうここにあるのは現実の光景でもなく、幻想である。現実には鄙の女性が葦付を瀬で採集しているのであろう。それを官女集団の雅な若菜摘みの如くに描いたのである。幻視であるだけに華やきの表面とは裏腹に、家持のうら悲しい心情が根本にあるのであろう。その意味では、表面だけではない孤愁の人である家持の内面にある真実をも表白した一首ということになる。

第二首の②は、鵜坂川の瀬を渡る時にうたったものである。鵜坂川とは現在の神通川のことと考えられている。題詞にある「婦負郡」とは、砺波より東隣であり、国府のあった射水郡より南隣に位置していて、富山市の南部を指す。第二首の問題の一つが、第三句にある。「この吾が馬」が「この馬」と「吾が馬」を併せ持つ表現であることを、中西家持は指摘する。一見表面的なものでありそうでも、存外に侘しい心情が表白されている、と言うことであろう。沢瀉注釈は、風格を指摘する。また、窪田評釈・伊藤注が「衣濡れにけり」ということに注目する。伊藤注は、当時の人々が旅先で衣が濡れることをことさら忌んだとして、衣を干すのが妻の仕事であったことから、濡れることで妻を偲んだとし、さらに巻九の、

焔干す人もあれやも濡衣を家には遣らな旅のしるし  
に（一六八八）

を指摘している。

旅人は雨で衣が濡れることを家に帰らせようとする使いと理解している。その意味では、衣が濡れているのであるから、家にいる妻の使いとして馬の足搔を考えてもよいの

であろうが、心情の中心は春の増水に驚いているということである。

第三首目③は、第二首と同じ婦負の郡で詠まれているが、川が鵜坂川から婦負川になっている。この婦負川については、常願寺川が立山のイオウを含むところから鮎漁に適さないのであろうか、鵜坂川、即ち神通川の下流であるとする意見が圧倒的である。季節的に北国の遅い春であるのに、鵜飼をしていることに對する疑問もある。橋本全注は、旅の一夜を慰めるために特別に催したものとする。伊藤注もほぼ同様に、結句「けり」の存在も配慮して特別の響応とする。中西家持は、鵜飼が大和朝廷の人々にとって珍しいとして、さらに「八十伴の緒」が朝廷の役人を指すのにこの鵜飼集団を、かく天皇に奉仕する役人として表現したことに對して、都と鄙の二重構造とする。

第四首④は、家持を代表する短歌として有名な作品である。富山県の東部に位置する「新川郡」の「延槻川」とするが、現在滑川市と魚津市の境を流れる早月川を渡るときに詠まれたものである。窪田評釈は、「手に入つた」技巧を指摘する。土屋私注は、「調の徹つた歌」という。武田全註は、「雪消の水で、河水の増しているその河を渡る姿が、よく浮かび出している」とした。伊藤注は、「訓詁は歌が

よくなるかどうかを基底においてなされてはならない」として、第二句にある「雪し消らしも」ではなく「雪し来らしも」と言う判断である。また、「雪し来らしも」の訓みが表現が圧縮されて詩情が高いようだという。

そもそも立山の雪解け水がやってきて鎧を濡らすのか、はたまた鎧まで増水していることから立山の雪解けを想像するのか、と言うことである。この「立山の」の歌は、春の出挙に素材を得ている第一首から第四首目まですべてが「瀬」を歌語にもっている。「瀬に立たすらし」「渡る瀬多み」「早き瀬ごとに」そして「川の渡瀬」ということである。ここに家持の意図があつたのである。これら四首は、題詞でいうところの「川の辺にして作れる」ということであり、春の増水した瀬を背景にうたっているのである。

万葉集では、人麻呂が吉野讃歌で「上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す」(一・三八)であつたり、笠金村も神亀二年の吉野讃歌で「落ち激つ 吉野の川の 川の瀬の 清きを見れば」(六・九二〇)とその聖地を描いている。田辺福麻呂は、三香の原の久迩京が荒廃しているのをうたう長歌で、「三香の原 久迩の都は 山高く 川の瀬 清し」として、さらに「住みよしと 人は言へども 在りよしと われは思へど」(六・一〇五九)とうたう。家持は、

まさしくここで越中を聖地として、さらに住み良く、居住すべき土地であることを踏まえて歌作しているのである。即ち、清い瀬に立つ乙女、多くの瀬がある土地、雅な鵜飼がなされる瀬、水量の豊かな瀬、何れも吉野と同等であるし、かつて都があつた「久迩」とも同質な立場なのである。さらにここでは都会風の幻想であるが乙女もいる。豊かな幸をもたらず雅な鵜飼もいる。加えてあの大和ではなかなか見られない急流で豊富な水量を誇る川もあまたあるのである。家持は清き「瀬」が豊かな実りと収穫をもたらずことを踏まえつつ、さらにここには越中ならではの風土もうたっている。

④立山の歌は、②鵜坂川を渡る歌と共通の主題がある。それは、春の到来に感動していることである。この雪解け水に春を見つめているのである。古今集でいえば、紀貫之は凍った水をとかす風に春を感じる心であろうか。藤原敏行は、秋の到来を風で知つたのである。家持は、水で春を感じているのである。

以上の四首には共通した素材が扱われている。「川」と「瀬」である。一般的に讃歌で瀬が問題になるときは、早い瀬か、或いは清い瀬である。この越中出挙歌では、早い瀬が一例用いられているだけであり、後は場所としての瀬が

問題になっている。一例早い瀬があるといったが、早い瀬が中心の話題にあるのではない。あるのは、この歌でも「婦負川の早き瀬」で行われる鵜飼いである。

富山県は三千メートル級の北アルプスが屏風として県境をなしている。富山湾の海岸から立山連邦が眺められるが、富士山を除けば海岸線から三千メートル級の山を眺められるところは無いであろう。しかも立山に降った雨も雪解け水も川として一気に流れ降り、富山湾にそそぎこむ。ことさら家持と必然的に結びついてくるのは、治水であろう。

越中の風土が家持をして川に拘らせたのであろう。日本中で海岸から三千メートル級の山が屏風のように連なっている事が出来る地域は、越中をのぞいて無いのであろうし、川は一気に海まで突き進んでいる。春は洪水の季節でもあったであろう。その安全祈願を含め、秋の実りまでも祈願しているのであろうが、表面的には呪術的な内容を感じさせないところに讃歌としての新鮮さがある。

## 二、能登の出挙

第一首①から第四首④までは、越中での創作であつた。第五首⑤は、能登の国に入ってから創作になる。歌の内容も変化が見られる。越中の川瀬をうたうことで国誉めや

土地誉めの意味も含ませていたが、能登ではさらに風土に対する率直な驚きが主題になって発展している。

第五首⑤「之乎路から」の歌であるが、題詞に「気太神宮」とあつて、現在「気多大社」と呼称される能登二宮に参拝かたがた訪ねた時の詠作である。家持は一度国府に戻つて旅の再準備をしたのであろうか。国府に立ち寄つたかどうかは不明でも、現在の氷見にある白が峰近くの山越えをして能登に入つた、と考えられている。「之乎路」については、『大伴家持と越中万葉の世界』に詳細に紹介されている。<sup>(7)</sup>それを参考にした時、二つのルートが考えられている。

① 氷見	小久米	三尾	走入	向瀬
石坂	志雄			
② 氷見	小久米	床鍋	白が峰	深谷
下石	志雄			

①のルートは、現在の幹線道路氷見志雄線であり、三尾越えという名称が与えられている。②のルートが床鍋越えといい、現在は山道であるが、もともと官道であつたとしている。

白が峰の標高、或いは日本海までの距離を考えた時、歌にある「羽咋の海」とは、現在その名残のみになっているが、古代の邑知潟とするか、或いは羽咋付近の日本海とするか、議論が分かれていても、外海説は古代の邑知潟が現在のそれと比較してそれほど大きくなかったとする考えでなければ成立しないであろう。邑知潟説は、沢瀉注釈、古典全集、橋本全注が指摘する。犬養孝氏は、『万葉の旅』で邑知潟に賛同している。羽咋付近の日本海というのは、窪田評釈、土屋私注、伊藤積注、中西家持などが採る説である。<sup>(8)</sup>

そもそも白が峰から日本海までは、およそ最短距離でも直線八キロメートル程ある。白が峰の標高が二七〇メートルと地図に記されている。その頂上から日本海を仰ぎ眺めた状態から、「之乎路から直越え来れば羽咋の海」さらに「朝風したり」と言う表現は、日本海より身近な光景でなければならぬのであるまいか。伊藤積注は、集中では、「朝風」の語がほとんど海に關して用いられているとして、歌は国見・土地誉めの型を踏むので、実用と結びつける必要もない、と言う見解を示している。また、題詞には「海辺を行く」とあっても、「感慨は山道を越え、外海を視野に納めたところの如し」ともいう。

一方邑知潟説としては、橋本全注が、歌の「之乎路から直越え来れば」と言う条件は、山越えしてきて、第一に眼前に広がって見えた邑知潟と見ることを支持している、という。どちらにせよ、峠や山を越えて眼下に広がる日本海か古代邑知潟か、どちらかを見て詠んだと言う点では共通するのである。さらに中西家持は、次の歌を引用する。

相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち渡る  
(十三・三三三八)

山を越えると海が見える場所は、畿内では逢坂山である。越えると琵琶湖が見える。家持は、引用した「相坂を」の歌を知っていたとしている。この「相坂をうち出で見れば」に匹敵するのが「之乎路から直越え来れば」と言うことになる。峠を越えて、或いは山を越えて眼前に広がる海ということであれば、やはり風土を背景に配慮せざるを得ない。また、朝風が海にのみ用いられる言葉ではない。巻八にある憶良の七夕歌に、「朝風に い掻き渡り」(一五二〇)とあって、天の川を船で渡る描写に用いられているし、池主の布勢の海水賦に「射水川 湊の州島 朝風に 潟ににあさりし」(十七・三九九三)とあるが、湊となっている河口



の渴を表現している。朝風は、要は海に用いられていると言うことであるが、海のみ限定されるということではない。次に問題になるのが古代の邑知渴の規模や位置である。

黒川総三氏は、一九七三年刊行の『羽咋市史』を引用して、邑知渴が「現在（人口千拓以前）の約二倍ぐらいの広さ」としていることに賛同している。<sup>9</sup> ここで鴻巣全釈が「今なほ口碑の伝ふところによると氣多神社南方の水田がつくられてゐるあたりまで、上代は湖水が浸入してゐたとのことである。家持はこの水路によることの便利を痛感して、この歌を作ったものに違いない。」という事に対して批判を展開して、黒川氏は「朝風」という歌語をも参照して、海上の労働に危険を感じさせる風波が邑知渴ではめつたに立たないとして、外海との関連で用いられた言葉である、とも指摘する。ここに至れば作品の鑑賞にもかかわるのであるが、外海だから風が船出のよい機会でもあるとして「船楫もがも」とうたった、とする。船の出帆に適した朝風、さらにその気持ちしが船と楫への希求になったとする。氣多神社への便利な船旅の気持ちしが朝風と船楫になったのか、出帆するために好都合な朝風と船楫になっているのか、いずれがこの歌の真の姿であろうか。

万葉歌の用例からは、朝風とは一般的に外海で用いられている。琵琶湖等の湖水で用いられていない。しかし、川の河口の渴等では、用いられている。黒川氏の論文で指摘したのは、広大な湖水ではなかったということであり、現在の氣多神社界隈の地形までも一氣に解決してしまったものでもない。とりわけ志雄町を流れる子浦川の流域付近に渴があった可能性までも否定していない。そもそも現在の地名にも「子浦（しお）」「深江」「柳瀬」「敷波」等が子浦川の流域に見られる。また、この歌が出帆の絶好の機会をうたったという解もどうかであろうか。中西家持が指摘する峠を越えて発見したことへの感動であろう。小野寛氏は、『羽咋の海』を外海とする説もあるが、一首の感動は、志雄峠を越えて最初に目に飛び込んで来る広大な邑智渴をおいでないだろう」という。<sup>10</sup> さらに、山口博氏は、二月だとすれば雪もあつてこの峠越えが馬も人も難渋したであろうから、「だれも静かな海の船行を思うだろう。『船楫もがも』はその気持ち」という。<sup>11</sup> 馬によつても難儀な峠を越えた家持の船旅に対する憧れがこの一首をうたわせたのである、とする。

さて、山部赤人の「田兒の浦ゆうち出で見れば」（三・三一八）にしても、薩埵峠を越えて瞬時の視野の広がりの中

で富士を見てうたった、と言われる。家持も峠等を越えて瞬時の視野の広がり羽咋の海を発見したのである。その海は朝風であると言うのであるから、経験的に八キロメートル以上も離れている日本海を考える必要はない。眼下に広がっていたのは古代の邑智潟であつて、日本海ではなかつたはずである。邑智潟の彼方に氣太神宮があつたのである。その意味からも、船と梶があつたら願う心情も率直なものとなる。しかし、古代邑智潟でなかつたとすれば、我々は家持という歌人によつて、新しい自然が創造された、ことを認めなければならぬのであるまいか。自然が芸術を模倣したのかも知れない。

第六首⑥は、旋頭歌である。しかも船旅であつた。家持は万葉集の一割以上が彼の歌で占められているが、旋頭歌はこの歌一首である。題詞にある「香島」とは、現在の七尾市であらうという。中西家持をはじめ諸注釈書は、熊来の旋頭歌が万葉集卷十六・三八七八、三八七九番にあるので、旋頭歌の収集とこのときに旋頭歌を作つたことの関連性を指摘している。この歌の特徴は、下句にある。「今日見れば」とある普通一般的な表現も、船材として有名な能登島をはじめ見て起きた感動として表されている。伊豆・熊野等が船材の産地であつた。能登が船材の産地であるこ

とはこの一首で知られるのであるが、家持もうわさを知つていたであらうがはじめて見る光景である。しかも、初句に「鳥総立て」という樵の宗教的儀礼をあらわす言葉を用い、いやがうえにも畏敬の思いもつとっている。「幾代神びそ」とは、今日見て伝聞で得た想像を越える畏怖を能登島の森に感じているのである。

第七首⑦は、道行で上句をいい、鄙の旅であることと望郷と言う下句の対照が一首の骨格である。能登では二首の望郷歌をうたう。次の第八首⑧もそうである。第八首は、能登半島東の海岸から反対の西海岸でうたわれている。旅もそろそろ答えが見え始めてきたのであらう。国守の責任もそれなりに果たしてきたのかもしれない。緊張の糸も緩める必要があつたのであらう。都の妹をしきりに恋しく思うのであらう。鄙を感じさせる土地の名前や川の名前に「香島」「熊来」「饒石川」を歌語に取り入れ、さらに「水占延へてな」といった特殊な占いであらうか、連続して鄙の気配を強調して、対照的な都の妹を浮き立たせている。

第九首⑨は、有名な歌である。この歌の特質としては、恐らく総距離三〇〇キロメートル、延べ日数として三週間程の任国での旅であつたが、春の出挙という任務も終わろうとしているその開放感が認めらるゝところにある。

問題点の第一は、題詞にある「治布」と「長浜」とにある。まず「治布」は、元暦本による。類従古集には「治郡」とある。新編全集は、元暦本・類従古集本の本文でも意味をなさないとしているが、一般的にはどちらの本文を採用しても、国府の意味にとつてゐる。残るのは「長浜」の問題であるが、国府付近の麻都太江長浜と七尾市付近の浦と云う説に分かれる。解決の根本にあるのは、珠洲市から高岡市近郊まで直線で八十キロメートル程あるということである。この距離を一日の船の行程として認められる立場の人は、国府近くの麻都太江長浜説になり、現実的に無理と考える立場からは七尾市近郊長浜説と云うことになる。一番いいのは、実験考古学的に古代船で確かめてみるしかないのあらう。しかし、船を作つても、その当時の航海技術までも復元できるか、或いは風や波までも再現してと云うことになつては眞の解決に何事もならない。

出発は、歌に朝とあるのであるから、空が明るくなった夜明けの時であらうし、着いた時は、月が照つていたと言ふのであるから暗くなつていたのであらう。旧暦の二月と考えれば夜明けとは午前四時より早いこともないであらうし、暗いのであるから午後六時前と云うこともないであらう。一日の行程十四時間でどの程度進むのであらうか。外

洋であるから梶ばかりか風の狀態も氣にかかる。

平安時代の成立になるが、詳しい行程については問題がないわけではないが、土佐日記の例を示したい。土佐からの帰任の旅五十五日の記録でもあるが、冬から早春の外洋の船旅でもあつて、同じ国司の立場も加味されてよい参考になるであらう、と考える。一番の難所であり、行程も長かつたのが一月二十一日の条、室戸岬を越えて高知県と徳島県の県境に近い停泊地にたどり着くまでであらう。土佐日記では、一日の行程として距離に換算して直線四十キロメートルを越えることはない。萩谷朴氏は、『土佐日記全註(12)』で「時速二キロメートル」として船旅を計算している。富山湾・日本海と土佐湾・太平洋という違いがあるにせよ、また帰任であるから大量の荷物がある貫之の旅であるにせよ、土佐日記は参考になる。珠洲から一気に富山湾を横切り、さらに直線で八十キロメートルもある氷見市や新港市までの航海を一日で出来るとする根拠は何であるのか。むしろ、その証明が待たれる。

家持は長い春の出発の旅を終えようとしていた。越中の四郡全てを巡っている。能登もやはり四郡であり、出挙には射水郡を除き、基本的な地名がこの旅で表記されているといつてよい。早朝に出帆した。長浜（七尾市付近の適当

な場所)まで帰ってきた時、既に月が出ていたのである。まだ旅が終わっているわけではないが、責任ある任務もほぼ終了して、危険に満ちた船旅も無事に終わろうとしている。そして、もうすぐ国府に帰られるという安堵に満ちている。月が照っていれば翌日も天気はよいはずである。明日には国府に帰るつくのである。その月に対する率直な気持ちがこの歌の創作動機にある。

### 三、望郷歌

越中での四首は、「川」と「瀬」が歌語として共通に用いられている。このことについて考えてみたい。卷十五の遣新羅使の歌に次の一首がある。

山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも  
(三六一八)

山から流れる川の清らかな瀬に遊ぶと都が忘れたいというのだが、国守巡行の最初は、少女が瀬で葦付を採っていたが、紅の裳が官廷の女官を連想させていると共に清き山から流れる川瀬で遊ぶ事が都会風なのである。都会風であることも国土の誉め言葉である。鄙にはまれな雅な光景か

ら一転して、越中の風土そのものが登場している。第二首の鶴坂川とは、現在神通川と呼称されている川であり、上流は北アルプスである。季節は雪解け水が増水しているので旧暦の二月であろう。北陸を代表する大河の姿が「渡る瀬多み」として描かれている。水量の豊かさが国土の誉め言葉になる事は、当然である。第三首目も「速き瀬」がうたわれている。第四首目も「川の渡り瀬鏡漬かすも」と増水に触れている。川の水量が多いことも国土の誉め言葉である。家持が試みた事は、越中では日本海に注ぐ旧暦二月の川が持つ特質を踏まえてうたをつくり、なおかつ馬での旅である事を基本にして国土讚美をも歌っていることである。川瀬に拘っているのは、国土讚美の方法であるし、しかもとりわけ越中の川が北アルプスの春の雪解け水で増水している特質を踏まえているのである。この中では富山湾の海岸から三千メートルの立山連邦の山々が見られる事から第四首目の延槻川が話題になるが、国府を流れる射水川にせよ、源は奥飛騨である。「川」「瀬」に拘る事は、国土讚美の方法である清き川、清き瀬を描くことに結びついていくが、その背景には雪解け水で増水する越中の川の特質がある。家持は、越中の川瀬で遊ぶことがあっても、それを踏まえて望郷歌を作ることはない。しかし、遣新羅使と

同様に、能登の船による船行では二首の望郷歌を作る。

さて、能登の五首は、「ば」が歌語として鍵になっている。文法的には確定条件を示す已然形接統の接統助詞ということである。但し、新編全集は、「反予期性が強く、逆説に近い」という。即ち、能登の旅で家持が体験したことは、予想に反していることが多々あったという事である。その一つに船旅もあったはずである。

さて、越中での行路には、基本的に馬を用いている。一方能登では船旅が基本である。また、その事を意識して「之乎路」の歌が詠まれた。神堀忍氏は、海の朝風を見ての感動が一首を生んだとして、「船楫もがも」は、以下二首の舟航を自然なものとし、さらに饒石川で一首（⑧四〇二八）までのリズムカルな展開を意図してのもの<sup>(13)</sup>という。天平二十年春の出挙の歌とは、越中での四首は、馬での旅を基本にして、川と瀬を歌うことで国土讃美も程々に描き得た。しかし、能登での五首は、船の旅を基本として創作されたために、望郷までもが加わっている。その越中から能登への橋渡しをするのが第五首目の「之乎路」の歌である。船旅とは、之乎路を越えるまでは憧れであったであろうが、旧暦二月の外海の日本海、乃至富山湾においても船旅は危険きわまりないものであろう。原因は風と波で

ある。船旅に対する批評はないが、望郷を募らせていることと妹を思い出させていることで旅の苦勞も知るのである。

まず、之乎路越えでは、眼下に広がる古代邑知潟を、能登島は年輪を経た樹木に覆われた神神しい姿に圧倒され、珠洲からの航海では長い航海の果てに予期しない月に感動したのである。越中の創作には風土に対する感動にも、土地誉め・国誉めという意味を附加して「瀬」を登場させ聖地を描いた。能登では明らかに予想外の感動があったのである。それが三首ものうたに「ば」を使用したのである。「ば」を用いない二首は、表面的には鄙を強調して都にいる妹を思い出させ、望郷をうたう。

能登での作品には讃歌の伝統を根本にして創作するという事を指摘できない。そこに特徴的に試みられているのは、一つが発見の「ば」の使用である。例えば赤人歌で有名な

田児の浦ゆうち出でて見れば真白に不尽の高嶺に雪は  
ふりける（三・三一八）

の第二句にある「ば」は、文法的に言えば已然形接統で順接の確定条件を示す接統助詞のばである。さらに時代別上代編には、「ある事柄に従って偶然にもう一つの事柄の起こ

る關係をあらわす」とあるが、むしろ赤人歌でいえば、確定条件を示すのではない。意味も「何々をして何々を見つめる」ということである。家持の歌には、

沖辺漕ぎ 辺に漕ぎ見れば 渚には あぢ群騒ぎ（十  
七・三九九二）

真權懸け い漕ぎ廻れば 乎布の浦に 霞たなびき  
（十九・四一八七）

などに見られるが、この二例はいずれも布勢の水海での遊覧でうたわれたものである。

「ば」を発見のばと呼称するのであれば、まさしく発見してうたうというのが能登での創作であつた。「能登の島山今日見れば」は、その「今日見れば」が興味深い。

皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり山川清  
み（七・一一三一）

もの思ふと隠らひ居りて今日見れば春日の山は色づきにけり（十・二一九九）

家持以前に歌われていたであろう二首と家持が用いた四

一一七番にしても、今日見て気がついたことをいう。家持が能登島に見たのは、「木立繁しも幾代神びそ」である。即ち、能登を支配する神の偉大さであるが、このことは能登で作られた他の四首に結びつくことはない。この歌は、讚美の性格がある。

ちなみに卷十六には能登に関わる民謡三首が納められている。立派な新羅斧を沼に落としてしまった男と浮き上がってくるかも知れないと慰める男の歌（三八七八）、酒屋で働き怒鳴られている奴と何とか連れ出してやりたい奴の歌（三八七九）、香島の机島の巻き貝を塩でもんで、高坏にもって、かわいい奥さん父母にさし上げたか、と問う氣遣いの夫の歌（三八八〇）、をうたっている。この民謡を知っていたから、旋頭歌という方法にも興味をもつたのである。上の句の「鳥総立て舟木伐る」という特殊な樵の風習にも興味を持ったのであるが、神の偉大を感じている一首である。

もう一つの特質として第七首⑦と第八首⑧の望郷歌の存在がある。能登での歌は、越中での創作とは異質である。それは、遣新羅使が航海途中で詠んだ歌の世界に結びつくことにもなる。望郷の歌を頻繁に創作する態度である。船を漕ぐ梶ではないが、波の間断なく寄せることと妹を思う

気持ち結びつけて、

神さぶる荒津の崎に寄する波間無くや妹に恋ひ渡りな

む（十五・三六六〇）

とうたうが、さらに下の句に「都し思ほゆ」が用いられて  
いる例も参考になる。

石走る滝もとどろに鳴く蟬の声をし聞けば都し思ほゆ

（十五・三六一七）

第八首目の⑧に関しては、山口博氏の説が興味深い。な  
ぜここで急に水占をしたのであろうか、と疑問を提示して、  
家持も何かに触発されて妻を思い水占をしたとしている。<sup>(14)</sup>

その触発されたのは、第八首の表記にある「饒」が原因と  
する。饒は、豊かに繁榮する意味だが、そのニギと慣れ親  
しむニキ（和、柔）とが通い合うとして、饒石川から妻を  
想起したとする。能登の巡行は、船旅が基本である。家持  
が遣新羅使の心境と同じでも不思議ではない。日本を代表  
する遣新羅使ですら、望郷と妹を思う歌を主に作っていた。  
国司家持がことさら土地誉めの歌を作る必要はない。陸路

の旅と船の旅とを同列に扱うことはできない。恐らく船旅  
の二月は、危険なことに満ち満ちていたのであろう。

天平二十年の巡行歌は、春の出挙ということで一連の作  
として作られた。しかし、陸路馬による巡行は、官人家持  
が国土を讃美する気持ちで歌に表現されていた。能登の巡  
行歌は、官人家持の私的な心情の発露が主なものになって  
いる。これは、船旅ということに由来すると同時に、国衙  
近くの風土と異なる能登に強く触発されたからであろう。  
それが発見の「ば」の三例になったのである。また、時と  
所によつては生死をも危うくする船旅ということが自由な  
創作を可能にして、望郷の気持ちを高めたともいえる。心  
境に近い存在を伺わせる遣新羅使の歌と同様に、国守家持  
というよりも奈良貴族としての心情を歌に詠っているの  
である。二首の望郷歌の存在がそれを物語る。

## 結 び

天平に十年の巡行歌を二部構成として考察できるが、そ  
こに立体的な構造を認めるわけにはいかない。例えば、一  
番と九番の歌には緊密な対応があるのであろうか。或いは  
馬での旅と船での旅に時間と空間の連続という以外に作者  
のいかなる意図が試みられているのであろうか。国守家持

の心情が九首にあることは当然であつて、積極的な意味で馬による旅で詠まれた越中での四首は、馬上の国守という視点から「川」と「瀬」で国土讃美を試みていた意図がある。一方、能登に於ける五首にも、一部に国土讃美の意図があつても、全ての歌が讃仰の精神で貫かれているわけではない。むしろ、歌を作る主題は遣新羅使人の場合と同様であつて、旅での発見と望郷という主題が主なものである。船旅の苦勞がそうさせるのであろうが、命がけの場合もこの航海にあつたであらう。その場合とりわけ私情の発露を歌に求めるのではないか。ここに巡行歌九首の統一的なテーマを見いだすのはいかがであらう。むしろ、その場その場での心情を大切にして、とりわけ能登では歌を作っている。家持が試みた羈旅歌は、まさしく基本としてその土地の風土を踏まえて作る、ということである。国守巡行による讃歌という統一テーマで全作品を貫くことはしていなかった。ただし、当初は馬の旅、船の旅ということでさらに構成に配慮しようとしていたのかも知れないが、現在伝えられている春の出挙歌は、その意味では旅の進行にそつて歌が配列されている日記的な要素があつても、構造と呼ぶような内容はない。春の出挙で家持が試みた羈旅歌は、官人家持を全面に打ち出すのではなく、左注にあるように

「当時、当所に属目して作れり」とある立場である。即ち、旅でのその時その場の景に触発され、新鮮な感動を得て歌作したのである。結果は、家持を代表する何首かの歌が誕生していた。

# 〔注〕

- (1) 「国守巡行の歌——大伴家持天平二十年諸郡巡行歌群をめぐつて——」〔上代文学〕第六四号
- (2) 「天平二十年諸郡巡行時の歌」〔万葉集を学ぶ第八集〕
- (3) 「国司巡行と四度使——越中に於ける大伴家持——」〔園田国文〕第五号
- (4) 伊藤博著『万葉集釈注』(九) 集英社 三五〇頁
- (5) 舟尾氏「春夏二季出挙の意義」〔日本の古代国家と農民〕所収 四八二頁
- 宮原氏「出挙の実態に関する一考察——備中国大税負死亡人帳を中心にして——」〔史林〕第五六卷五号
- (6) 近代の注釈書は、略称を用いてで引用する。引用した注釈書は、以下の通りである。
- 鴻巣全釈 鴻巣盛広著『万葉集全釈』 大倉広文堂 昭和九年
- 土屋私注 土屋文明著『万葉集私注』(十二) 筑摩書房 昭和五十二年版
- 窪田評釈 窪田空穂著『万葉集評釈』(八) 東京堂出版



昭和二十七年版

岩波大系『古典文学大系万葉集』(四) 岩波書店 昭和三十

十七年

沢瀉注釈 沢瀉久孝著『万葉集注釈』(十七) 中央公論社

昭和四十二年

武田全註釈 武田祐吉著『増訂万葉集全註釈』(七) 角川

書店 昭和三十二年

古典全集『古典文学全集万葉集』(四) 小学館 昭和五十

年

古典集成『新潮古典集成万葉集』(五) 新潮社 昭和五十

九年

中西口訳注 中西進著『万葉集全訳注原文付』講談社 昭

和五十九年

橋本全注 橋本達雄著『万葉集全注』(十七) 有斐閣 昭和

六十年

中西家持 中西進著『大伴家持3 越中国守』角川書店 平

成六年

新編全集『新編古典文学全集万葉集』(四) 小学館 平成

八年

伊藤釈注 伊藤博著『万葉集釈注』(九) 集英社 平成九

年

(7) 『大伴家持と越中万葉の世界』(高岡市万葉のふるさとづく

り委員会 昭和五九年) 第五章 越中万葉の地理

(8) 『万葉の旅(下)』羽咋の海 二二四頁

(9) 「羽咋の海考」(『上代文学』第五五号)

(10) 『孤愁の人大伴家持』(日本の作家4) 春の出挙 一五八

頁

(11) 『万葉の歌人と風土(北陸)』 一八二頁

(12) 『土佐日記全注釈』「その航海速度は大体一時間二ふた弱で

あったと思われる」二二〇頁

(13) 「国守大伴家持の巡行——天平二十年の出挙をめぐつ

て——」(『国語と国文学』第七一卷七号)

(14) 注11に同じ。一九〇〜一九一頁